

おしゃべりなオナラ

Lazy Yoshi



「ミューちゃん、きのう、幼稚園でもらっちゃったでしょ！」キョンちゃんが、目をこすっていると、そう話してきた。「えっ！なんでわかったの？」「えへ。お姉ちゃんは、なんでもわかるの！」キョンちゃんは、えらそうだ。「お母さんに、きいたの？」ミューが、おもしろいことは、お母さんとミューだけのヒミツだ。お母さん、キョンちゃんに、しゃべったのかな？「お母さんが、そんなこと、いわないよ。お姉ちゃんには、ミューのこと、なんだって、お見とおしなんだ。」キョンちゃんは、ニヤニヤわらっている。

「へんだな？お母さんと、指切りしたのに！」ミューは、しょんぼり。「キョンちゃん、なんでわかったんだらう？」ミューは、ねむい目を、もう一度、こすりながら、ベッドから、めけだした。

おべんとう

「ミュー、はやくご飯食べなさい。幼稚園おくれるよ。」お母さんは、いつものお母さん。ひみつをキョンちゃんに、おしえるわけない。「はい。」ミューは、トーストをたべた。「おべんとうは、そこにあるから、じぶんでいれてね。」「はい。」へんじをしながら、おべんとうのふたをあけて、あわてて、ふたをしめた。「はあ・・・」といいながら、おべんとうをバッグにいれた。

「ってきます。」「行ってらっしゃい。気をつけてね。」ミューは、トボトボと幼稚園に出発。「おべんとうの中に・・・」ミューのだいきらいな、おかずがはいっている。「ミューちゃん、おはよう。」「おはよう。アちゃん。」「おはよう。」「おはよう。」「おとだちと、あいさつ。いつのまにか、おかずのことは、わすれて、幼稚園にとうちゃくした。「先生。おはようございます。」ミューのいちにちが、はじまった。

ニンジン

「ミューちゃん、きのう、おべんとうのニンジンのこしたでしょ！」また、キョンちゃんが、目をこすっていると、そう話してきた。「えっ！なんでわかったの？」「えへ。お姉ちゃんは、なんでもわかるの！」キョンちゃんは、また、えらそうだ。「うそおー。なんでわかるの？」キョンちゃんに、きいてみた。

「しんじてもらえないとおもうけど・・・」キョンちゃんは、なかなか、おしえてくれない。「しんじるから、おしえて！」「ほんとうに、しんじる？うそみたいなはなしだけど・・・。やくそくできる？」キョンちゃんは、いじわるだ。「やくそくする！」ミューは、すこし、おこりながらいった。

「あのねえ。ミューが、ねているとき、ミューのオナラがおしえてくれるの！」キョンちゃんが、ふしぎそうなかおで、おしえてくれた。

しゃべるオナラ

「ウソー！」ミューは、オナラがしゃべるなんて、信じられません。「うそじゃないよ！」キョンちゃんが、おおきなこえで、いいました。「ぜったいウソ・・・」ミューは、なみだが、でました。「ほんとうだよ。」キョンちゃんは、こんどは、やさしく、いいました。「ほんとうなの？」ミューは、ききかえしました。

「ほんとうもほんとう。わたしも、ビックリしたもん。ミューのおしりから、プープープープーじゃなくて、ニ、ン、ジ、ン、だもん。」キョンちゃんが、ニコニコしながら、いいました。

「ニ、ン、ジ、ン、ってきこえたとき、ミューは、ニンジンのかした。ピピインときたの。」キョンちゃんは、すこしえらそうに、いいました。

「キョンちゃんのバカ！」ミューは、また、なみだが、こぼれました。

「ミューちゃん、とびばことべないの？」つぎの朝、また、キョンちゃんが、いいました。「なんでわかったの？」ミューは、きのうの幼稚園で、とびばこをとべないで、ベソをかいたことを、おもいだしました。「だから、オナラがおしえてくれるんだって！」キョンちゃんは、たのしそうにいいました。「ほんとなんだ・・・」ミューは、そういいながら、「ハア・・・」とこえが、でました。

「オナラが、しゃべる。オナラが、しゃべる。」キョンちゃんは、おもしろそうに、くりかえしました。「キョンちゃんのバカ。バカ。バカ。」ミューは、それしか、いいかえせませんでした。

「いいことかんがえた！サツマイモをたくさんたべて、ほんとうにしゃべるか、ためしてみよう！」ミューは、オナラがしゃべるのか、ためしてみることにしました。

オナラはプー

「お母さん、おイモある？」ミューは、ききました。「ふかしたのならあるわ。」お母さんは、そういいながら、サツマイモをミューに、わたしてくれました。

おイモをたべると、すぐに、オナラが、でそうになりました。ミューは、コツソリ、へやにもどって、オナラが、しゃべるのかためしてみました。「プー！」おおきなオナラがでましたが、音はプーです。なんども、ためしてみますが、オナラの音は、やっぱり、「プー！」でした。「おかしいなあ。しゃべんない。」ミューが、つぶやいていると、キョンちゃんが、へやに、はいつてきました。

「くさい！ミュー！おならしたでしょ！」キョンちゃんが、大きなこえでいいました。「うん。でも、しゃべんないよ・・・」ミューは、小さなこえで、いいました。「へんだなあ。きつとねているときだけ、しゃべるんだよ。」キョンちゃんのこたえに、ミューは、ガッカリしました。

しゃべるかな？

どうしてもオナラがしゃべるのを、きいてみたいミューです。「いいことかんがえた！」ミューは、めをつむるだけで、ねむらなければ、しゃべるオナラをきけるかもしれないと、おもいました。ベッドにもぐりこみ、かるく目をつむって、オナラのでるのを待ちます。「はやくでないかな。」とおもえばおもうほど、オナラはでてきません。おもいきって、おなかに力をいれると、大きなオナラがでました。

「プー！」いつもの「プー」ではなく「プー！」でした。そして、やっぱりしゃべってはくれません。ミューは、ガッカリしました。それでも、あきらめきれずに、おなかに力をいれると、「プープープー」と、こんどは、いつものオナラがとまらなくなりました。「ああ、だめだ。」いつのまにか、ミューは、スヤスヤとねむってしまいました。

おこってる

「ミュー！もんくあるなら、口でいえばいいでしょ！」キョンちゃんのどなりごえで、ミューは、目がさめました。「口でいわないで、オナラで、『バカ、バカ、キョンちゃんのバカ』。うるさくて、ねむれなかったわ！」キョンちゃんは、ものすごくおこっています。「口でいわないで、ウジウジしているから、オナラがしゃべるんだ！きっとそうだよ！」キョンちゃんは、まだ、おこっています。

「だってさ・・・」ミューは、「ごめんね。」といえずに、なみだがでました。「ほんとうに、すぐベソをかくんだから。」キョンちゃんは、こんどは、すこしやさしくいいました。「だってさ・・・」ミューは、やっぱり、ことばがでません。

「もういいよ。でも、ちゃんと、いたいことは、いわないとダメだよ。」キョンちゃんは、ミューのあたまを、なでながらいいました。「うん。わかった。」ミューは、小さくあたまをさげました。

せんせい！

ミューは、いつものように、幼稚園にいきました。みんなで、うたをうたっていると、オシッコをしたくなってきました。みんなでうたっているのに、あしをバタバタしてみました。でも、ダメです。こんどは、てのひらを、おもいきりにぎってみました。やっぱりダメです。こんなとき、いつものミューは、こえをだせずに、もらしてしまうのです。

でも、今日のミューは、ちがいました。「先生。おしっこ。」小さなこえをだしてみました。小さなこえなので、だれも、きがついてくれません。「先生！おしっこ！」こんどは、大きなこえで、いってみました。

「先生！ミューちゃん、おしっこだって！」みんなも、せんせいにいってくれました。「あら、ミューちゃん、おしっこの。はやくトイレにいってきなさい。」せんせいは、やさしくいきました。

「はい！」ミューは、はしってトイレにいきました。

ブー

「ミュー、たいへん、たいへん！」キョンちゃんが、ニコニコしながら、ミューをおこしました。「なああに？」ミューは、目をこすりこすり、ききました。「ミューのオナラ、しゃべらなくなっちゃた！」キョンちゃんは、はやくちでいいました。「ほんとう？」ミューは、目をパチクリしました。「うん。ブーって大きなおとだけで、しゃべらなくなっちゃた。」キョンちゃんは、ちょっとガッカリしながら、いいました。

「やった！」ミューが、大きなこえをあげたとき、ブーと大きなオナラがでました。「また、大きなオナラ」と、キョンちゃんはいいながら、プーとキョンちゃんもオナラをしました。ふたりは、ゲラゲラ。わらいが、とまらなくなりました。

そのとき、へやのドアがあいて、お母さんがはいてきて、いいました。「あさから、ゲラゲラうるさいわね。それに、なんか、このへや、くさいわ。」ふたりは、かおをみあわせて、また、ゲラゲラわらいました。

これで、このはなしはおしまいです。